

消失点・バートン・フィンの壁・選択の壁

郡司ペギオ幸夫（いきていることの科学・抜粋）

養老孟司のバカの壁が流行ったからというわけでもないが、壁、限界というものについて論じようと思う。壁、限界は、一般に、見通せぬ果てと理解されるだろう。地球が丸いことを知らなかった船乗りが想像する、海の果てのように。壁、限界は、それ以上進めないという閉塞感を創り出し、できれば突破され、壊されねばならないものという感じを与える。果たしてそうか。壁と、壁の解決という分離は成立しないのではないか。壁のありようを考え直し、最後には、選択の壁（選択の躊躇・不可能性）について論じよう。

私たちの側、こちら側に、行くことができ、操作することができ、認識することができる世界があり、その世界の果てとして壁・限界がある。私たちの側で、事物は事物として存在し、操作可能である。それは自明である。この自明な世界を境界付ける、私たちの能力を境界付けるものが、壁である。通常、そう理解されるだろう。このとき、壁、限界は、区別や操作の可能性を否定する、悪しき存在である。そうだろうか。消失点という限界を考えてみよう。消失点は、遠近感を、平面上で構成する道具である。平面に点を一つ設ける。この点を、無限遠の或る空間、もはや広がりがない一点であると想定する。ここから放射状に伸びる全ての線は、近景と無限遠を結ぶ線となる。かくして遠近感をもつ立体は、消失点に収束する同じ遠近感をもつ平面をまたぎ、透視図として描かれることになる。こうして平面に、遠近感、立体感が生まれる。

消失点は、無限遠の極限であり、点である。だから、それ自体の内部に、遠い・近いの区別をもたない。つまり近景で可能な区別、近景で区別される個物を否定した地点である。水平線のような果てであり、区別の果てである。しかし、まさに消失点は、遠近の区別を可能とするために発明され、設定された限界点である。個物の区別を無化する限界であると同時に、個物の区別を可能とする装置である。これは極めて重要な問題を示唆している。先に述べたように、通常、個物の差異は、それ自体あたりまえに認識されるものであり、個物の認識を否定するような果てとして、限界は想定される。しかし限界が設定されるからこそ、そのことによって、個物の認識が可能となる。限界がなければ、もはや個物というものの、区別は成り立たない。限界は、そのような積極的役割を担っている。それが、限界・極限・果ての存在理由である。消失点は、自明であると信じてきた個の区別と、それら区別を否定する極限としての限界が、実は互いに相手を補完し、根拠付ける関係にさえあることを示している。

二つ目の補助線として、映画「バートン・フィン」の壁を考えよう。1991年に公開されたこの映画は、カンヌ映画祭でグランプリをとったこともあり、多くの人知っているだろう。私は名前を知っただけで、長い間観る機会がなかったが、つい先日ビデオを借りて観た。主人公バートン・フィンは作家であり、時代は第二次大戦直前。ニューヨークでの演劇の脚本が評判を呼び、フィンはハリウッドへ招かれ、お抱えの脚本家となる。映画会社の社長に、B級プロレス映画を書け、と言われる。フィンは、薄暗くクーラーの効かない、古びたホテルの一室で、タイプライターに向かう。毎晩蚊に刺され、隣室の音に集中できないでいると、暑さで壁紙が剥がれる。剥がれた壁紙から、粘っこい糊を流れる。凝視した壁に貼られた、海岸で半身に寝そべる美女の写真が、何度かアップになる。全く書けないフィンの毎日が、この調子で淡々と描かれる。隣室に住む、生命保険の営業マンと会話を交わすようになり、彼が若いころレスリングをやっていたということや耳垂れに悩んでいること、また、アル中の作家ビルにヒントを得ようとする逸話が挟まれるが、閉塞的な、陰鬱な画面のまま、物語は進行する。

或る日フィンは、彼の部屋で、ビルの恋人と一夜を過ごしてしまう。翌朝、彼は、血まみれの死体になった彼女をベッドでみることになる。友人のいないフィンは、隣室の営業マンに相談する。彼は死体を処理し、「おれは営業でしばらく東部へいくが、何も心配するな」と言い残し、出て行く。数日後、二人の刑事が訪れ、営業マンの写真を示す。そして、彼が殺人鬼ムントと呼ばれ、つい先日も若い女をめった刺しにした死体が見つかり、おそらくムントの仕業であろうと告げる（もち

ろんこれはビルの恋人だ)。ムントが若いときレスリングをしていたという点に着想を得、フィンクは猛然と脚本を書き上げる。書き上げたとき、刑事が現れ、フィンクを共犯の疑いで連行しようとする。ここへ、ホテルに火をつけムントが戻ってくる。ムントはショットガンで刑事を殺害し、火のついた自分の部屋へ戻る。ここが自分の家なのだ、と言い残して。フィンクは、完成した脚本をもって、社長を訪ねる。市井の個人としてレスラーの閉塞感と懊悩を描いた、傑作であると信じ。しかし、社長は彼を罵倒する。何様のつもりだ。こんなものを書きやがって。おまえが一生世に出られないようにしてやる。俺の目の届く範囲で、一生飼いきれ、と。

物語だけ追っていくなら、これで話は終わりである(ムントがフィンクに託した、おそらく女の首であろう荷物をフィンクが最後まで開けずに携えるが、それはサスペンスとしての調味料に過ぎない)。映像的に特異な点はあるものの、作家の孤独と狂気が創りだす悪夢というところだろう。しかし最後のワンシーンによって、本作に対する理解は一変する。最後のシーン、フィンクは晴れわたった明るい海岸を歩く。所在なげに座り込むと、若い水着の女性が現れる。あなたは女優か、と聞くフィンクに、女性は笑みを浮かべ、海に向かって半身に寝そべる。その向こうで波が砕け、画面は暗転する。

最後のシーン、それはまさにホテルの壁に貼られた写真そのものである。この映像が現れた瞬間、私には様々なイメージの関係が構造として押し寄せた。剥がれる壁紙から流れる糊は、ムントの耳垂れである。フィンクの部屋は、煩悶し、切れる寸前の、沸騰状態にあるフィンク自身の頭の中であり、ムントの頭の中である。糊や耳垂れは、沸騰寸前の脳から漏れる、無意識の、苦悶の叫びだ。壁は、頭蓋であり、煩悶する意識を封じ込める限界である。結局これを突破できなかったムントは、自分の部屋へ、壁の内側へ、帰るしかなかった。フィンクはどうか。彼は壁を突破したと信じた。しかし社長に罵られ、飼いきれを宣言され、彼もまたムント同様、部屋の中へ封じ込められる。暗いホテルから逃れ、明るい海辺を歩いているにもかかわらず、壁に貼られた写真と同じ光景が現れる。それはまさに壁に貼られた写真であり、部屋の壁が出現したのである。海岸を歩きながら、フィンクは壁に閉ざされる(まるで、風景画が風景に聳え立つ、ルネ・マグリッドの絵画のようだ)。

フィンクの壁は、最後のワンシーンによって、鮮やかに壁の両義性を浮かび上がらせる。第一に、壁が、不変な確固とした存在でありながらも、常に変質し消え去りまた別の地点に出現する、うつろいゆく存在でもあるという両義性があげられる。確実な、現前する部屋の壁は、フィンクに閉塞感、生理的不快感を味あわせ、小説を書かせない。彼は或るとき猛然と書き出す。もはや壁は変質しているがため、彼はタイプを打てる。壁はやがて消え去る。しかし最後になって、社会通念上の壁、コミュニケーションの壁、として、部屋の壁が全く意味を変え、海岸に出現する。それは籠の鳥となったフィンクにとって実在する壁なのだ。第二に、やはり消失点のように、壁には、区別を無効にする役割と、区別を根拠付ける役割との両義性がみとれる。苦痛であれ、不快感であれ、それは感覚として個物化されたから感じられる。その個物化を実現したものはホテルの壁である。ここにはネガティブな印象しかない。しかし、ムントの正体が露見したことを通して現前する、糊をたらした壁は、まさに耳垂れをたらしたムントの頭蓋へ変質し、この変質した壁ゆえに、フィンクは、ムントの懊悩を背負ったレスラーを個物として立ち上げ、脚本を書き上げることができる。壁は、或る言語空間を設定する装置である。言語空間の果てであると同時に、空間固有の区別を可能とする。壁が変質するとき、事物の区別の仕方、ものの見方が変化する。

フィンクの壁を経由することで、我々は、最初にあげた消失点以上の理解を、壁・限界に得ることができる。消失点でみた限界の描像は、個物の区別と限界との補完関係(および否定関係)だけであった。フィンクの壁では、壁が有する確実性と可変性との両義性さえ認められた。この性格を消失点に見出すことができるだろうか。もちろんできる。消失点もまた、発明され、発見されたものである、という点に目を向ければよい。例えば個物の区別と限界(消失点)の補完関係を見出したところで、この性格のみに閉じてしまうなら、補完関係は結晶のようなものだ。ひとたび発明されてしまえば、消失点という限界は、制度それ自体となる。個物、遠近感、距離と異なるものとみなされ、消失点自体も有するはずの、区別や操作可能性は見失われる。しかし、この限界自体、操作され、創られたものだ。その起源を含めて考えるなら、この限界もまた操作可能、区別可能で可変なものである。だから、消失点もまた、フィンクの壁同様、頑健でありながら、あるとき劇的に変質し、

別な遠近感を提示する装置となり得る。絵画だったら、こうして、キュービズムが現れた。このことは、我々に時間的な、消失点の起源という問題だけでなく、空間的な広がり、当たり前なことだが、透視図の外側にこれを描く人や世界があるということ思い出させる。透視図が完結した世界ではなく、その外部に現実の世界があるからこそ、透視図という制度の限界もまた、操作可能で変質可能なのである。消失点は、消失点を生成する環境に開かれていることをもって、まさにフィンクの壁のごとく、変化を潜在する。

村上龍の、「13歳のハローワーク」は、壁は変質するもので、その限りで我々は時間の中に生きられる、とのメッセージを含んでいる。様々な職種を列挙することは、マニュアル本のような体裁をとる。マニュアル本であるとみなすとき、それは選択以前の可能な世界の提示という趣をもつ。選んでしまった後、そこには一個の現実が出現する。選択以前に並ぶ職種は、横一線に等価で多様であり、仮想的で理念的存在に過ぎない。他方、選んでしまった一個の職種は、現実として生身の体に作用する。可能世界と現実の、この乖離に、現代の若者は飛び込むのを躊躇する。意識された可能世界と現実の乖離は、ますます、並列的な多様性と一個・性との差異を際立たせ、多様性を、一個・性の否定形と位置付ける。こうして、選択以前の多様な職種は、決して選択できないものと再定義される。もはや可能世界と現実の一個をまたぐ選択は、決して実現されない。逆に、決して選択されないことで、選択以前のいま・現在という現実が根拠付けられる。リアリティーのない現在は、未来に対して決して選択しないことで、現在と可能世界との乖離、対を構成し、その対立図式によってしか根拠付けられないほど脆弱である。

原理的に選択されない可能世界は、その内部に区別を持たない。様々な職種を列挙しようと、そのカタログは本質的に消失点と同等である。区別をもたずに遥かかなたに並ぶ、水平線のようなものだ。それは壁である。この壁と現実とが、概念上の身分規定を異にし、乖離することのみ、両者の補完関係が取り結ばれ、現実が根拠付けられた。可能な職種と現実との関係は、消失点と近景との関係、フィンクの壁と小説を書き上げるものの見方との関係に同じである。しかし、決して選択されないことに留まり続ける限り、壁が変質すること、壁自体も操作可能であることが、見落とされている。壁自体も変質するのは、その外側に、現実世界が広がっているからだ。現実の世界ゆえに、実際、壁とその内部にある現在の関係は、結晶的な不変な構造ではなく、絶えず相互作用し蠢いている。壁との外部にある現実世界との干渉ゆえ、壁は片時も同じであることがない。絶えず変質し、したがって、壁内部の現在（括弧つきの現在）も絶えず変質する。すなわち、壁と括弧つきの現在との相互作用＝選択は、決して実現されないどころか、絶えず実行されている。もはや、括弧つきの現在と可能世界（壁）の分離は意味をなさない。両者の不断の相互作用、選択として、現実世界の中に現在が進行する。結晶的に区別された括弧つきの現在、未来（可能世界）は、本質的に分離することができない。ここに本来の現在、時間の中に生きるという実相がある。

何故選択がなされないか。それは、そもそも脆弱なリアリティーを括弧つきの現在と位置付け、可能世界との乖離、選択の不可能性によって根拠付けるからであった。ではそもそもなぜ、リアリティーが脆弱なのか。それは、壁の外部に広がる現実世界が無視され、むしろ壁という理念的可能世界と、現実世界とが同一視されるからだ。科学や数学は、現実世界を理解するための優れた道具である。しかしその圧倒的な能力ゆえに、道具が現実の世界と同一視され、世界は分析され尽くした理念的な存在であるとの誤解を生む。現実世界＝可能世界という誤解によって、いま・現在は、括弧つきの現在へと矮小化され、選択しないことのみ擁護される。

理念的な世界と現実世界の同一視が、現代社会の底流をなしている。テレビや雑誌を通じ、イチローや野茂は、子供の頃から野球選手を夢見、それを実現したという情報が入ってくる。これは、平凡な「わたし」からみると理念的な存在＝情報、に過ぎない。しかし「わたし」は情報をわたしの現実と混同し、本当に好きなことを選択しなければ、といった強迫観念にかられる。イチローや野茂に負けない、本当に好きなこと、を求めて。本当に好きなこと、とはなにか、に囚われた刹那、選択における可能世界と括弧つきの現在の二項対立に囚われ、選択は不可能となるというのに。

本当に好きなこと、を考えることは大事なことだ。しかし衿をただし、改めて考えることではない。「わたし」は既に一個の現在を、時間を、生きている。その限りで選択してしまってきている。可能性と括弧つきの現在は乖離せず、可能世界は既に均質ではない。選択する現在は、未来の可

能性（均質で不変な可能世界ではなく、分布をもち動的なそれ）を込みにして存在する。「わたし」のいま・現在が、選択それ自体である以上、イチローや野茂をもってきて、「わたしの好きなこと」の選択を大上段に考える必要はない。情報としてのイチローや野茂の選択と、あなたの選択を同一視する必要はない。これだけで、いま・現在が実感され、選択は自ずと実現されるようになる。それでも、理念的世界と現実世界の同一視という病は、ひとたび完成するとなかなか抜け出せない。村上龍は、もはや20代を見切ったのだろう。14歳にとって、列挙された職種は、水平線ではないということだ。見切られていいのか。

3年前、研究室にいた或る学生は、4年間をほぼサッカーに明け暮れたといていた。成績はあまりよくなかったものの、卒論では自らテーマを見つけ出し、実験をして猛然と書き上げた。彼は理系だからシステムエンジニアにでもなるかな、と言っていたが、「やっぱ、自分はパチンコばかりやってたような気もするんで、パチンコメーカーに行きます」と就職を決めた。いい感じだと思う。選べない、と悩む人は、まず真剣に選ぶということをしているつもりの方が、理念的世界と現実世界の混同をしていないか、考えてみるといい。あなたが思う括弧つきの現在を構築する壁は、まさに絶えず変質することで、いま・現在を、あなたという場所に、もたらしているのだから。